

日中・日韓関係を含めて日本がアイデンティティを取り戻すには？

「日本は戦略国家たるべきで現実の外交力を持たなければならぬ」

「中華民族の偉大なる復興」を叫ぶ中国の習近平政権。尖閣問題で日中間に摩擦が生じている中、最近では防空識別圏を拡大させ、東アジアに緊張感が走っている。中国は戦略的に手を打ってきているが、日本はどう対応すべきか。また、北朝鮮の政権内部で粛清が行われる一方で、隣国・韓国とどう向き合うべきなのか。政治の領域で抜き差しならぬ関係を迎えている中、日中・日韓関係のあり方を探る。

なぜ日本は抑止力を持たねばならないのか？

—— 突然の中国による防空識別圏の問題や年末の安倍首相による靖国神社参拝など、日中関係に緊張感が漂っています。われわれはどういうスタンスで臨むべきか。現状分析をお願いします。

渡辺 まずは国際秩序を中国がどのように意識しているのかを理解しなければなりません。中国は彼の国に固有な「伝統

中国は彼の国に固有な「伝統

的な国際秩序観念」に根ざした行動をとっています。それは非常に強靱なものです。両国首脳の話し合いによって解決できるほど簡単なテーマではないと思われまます。

海に向かつて膨張する中国に對抗できる抑止力を日本が持たねば、話し合い自身が成立しないというテーマではないかというのが私の考えです。

—— 「華夷秩序」と言われる国際秩序観念ですね。

渡辺 はい。中国の伝統的な

国際秩序観念とはどういうものかを考えてみますと、王朝の力の及ぶ外縁を切り取った辺りまでを自らの領土とする（50頁図1参照）。そういう観念を持ってきたと思うのです。

図1の中央には中華（中原）がある。「中原に覇を競う」とか「中原に鹿を追う」といった表現がありますが、中原とは黄河の下流域から中流域までです。現在の地名で言うところ、河南省の華北平原辺りです。どうやらそこが漢民族の発祥の地というイ

メージを中国人は持っているようです。

そこで覇を競って権力を握った者が、天からその地の支配を命じられた天子様、つまり皇帝です。先ほどの「中原に鹿を追う」の「鹿」は覇を競って支配力を勝ち取った権力者のことを指します。その中華が外縁的に少しづつ広がっていきます。国境がどこかという観念はありません。図1には明白に外縁が書かれています。実際にはもつとはるかにぼやとした曖昧な

拓殖大学総長

渡辺 利夫

Watanabe Toshio



わたなべ・としお

1939年山梨県生まれ。70年慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授などを歴任。拓殖大学国際開発学部長、大学院国際協力学研究科委員長などを経て、2005年より学長。11年12月より総長。

ものです。

西はヒマラヤ山脈まで届き、北方から西方にかけてはモンゴル草原から満州にまで続く。南方は海に消えてしまうので、さらにぼんやりとしています。その外縁よりさらに外にあるものが北狄・南蛮・東夷・西戎と言われた。

狄・蛮・夷・戎といったそれらの文字は全て同じ意味です。人間の顔をしているのだけれども、人間ではない、とても文明度の高い中華の人間が付き合うようなものではない、異様なもの、という感じだったのでないでしょうか。

中国を中心に同心円的に広がる「華夷秩序」

—— 漢民族を中心にして、天下が形成されているというわけですね。

渡辺 はい。中華こそが価値において最も高く、中華を中心として同心円的に広がり、周縁に位置する人種や民族ほど文明が低いとみなす古来の価値観

が「華夷秩序」です。この秩序観念は、古来より現在まで牢固として生き残っています。

中国人の意識の中には、我々が考えているような国際法上の国家の関係秩序、つまりは、国家相互は平等で対等だといった観念は弱いものでしかありません。価値が高いか低いか、文明化しているか未開か、といった価値の観念しかない。この観念は現代にまではつきり残っていると言えるのではないのでしょうか。

—— この価値観は現在の共產党体制にもある？

渡辺 そうですね。中国人は序列を付けないと座りが悪いという感覚を常に持っています。例えば、中華料理屋に行つてホストはどこへ座るか、1番目のゲストはどこに、2番目はどこに座るか。我々日本人は、そこまでこだわりませんね。

ところが、中国人の場合、どんなに大きな中華料理屋のテーブルに座つても、トップがどこに座り、2番目がどの席に、と

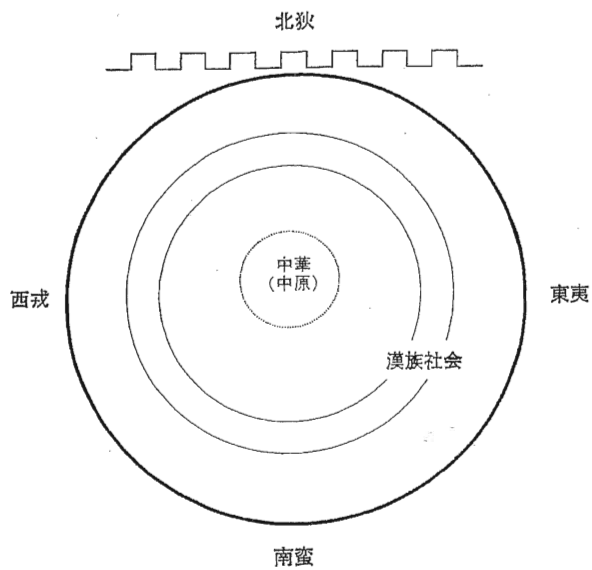


図1 伝統中国の国際秩序観念図

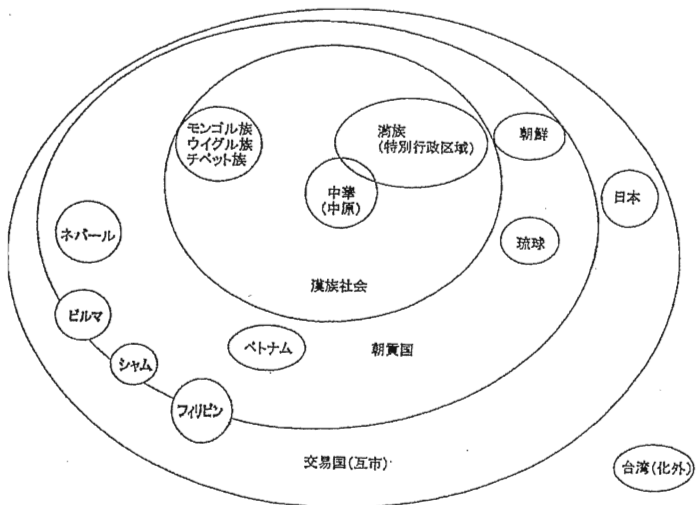


図2 大清帝国の国際秩序観念図

パッとわかる。そういう序列が国際秩序観念の中でも生きているのだと思います。

—— その古来の中国の伝統を認識しないとイケませんね。では次に中国内部の習近平体制についてはどう見えていますか。

渡辺 昨年の11月で習近平体制になり、それからちょうど1

年が経ちました。

12年11月に中国共産党第18回全国代表大会が開かれ、その後開催された第1回中央委員会総会（一中総）で周近平氏が党総書記に就任しました。

同時に、一中総で習氏は中央軍事委員会の主席となり、人民解放軍のトップに就任。13年に

入り全国人民代表大会が開かれて、そこで国家主席に選ばれた。その結果、習近平氏は中国の3権のすべてを握ったことになるわけですね。

党総書記就任を前後するあたりから、習近平氏が何を政策のプライオリティに置いて、何を実現しようかというステートメ

ントを繁く発信し始めるのですが、以前の総書記とは違うなという感覚を持ちました。

「中華民族の偉大なる復興」を叫ぶ習近平の中国

—— 具体的にはどういったところに、そういった変化が感じ取れますか。

渡辺 彼の演説のキーワードは「中国の夢」「中華民族の偉大なる復興」というものです。こういった用語法はこれまでの指導者からは習近平氏ほど頻繁には聞かれませんでした。

総書記になった直後、習氏は天安門広場に面する中国国家博物館という中国革命の栄光を顕示する博物館に赴いて、次のような講話を発表するんです。以下は、その要約です。

「アヘン戦争での敗北以来、170年余にわたり屈辱の歴史を背負わされてきた我が中華民族が、ついに偉大なる復興への道を探り当て、世界を瞠目させる成果を収めつつある。中華民族の偉大なる復興こそが、近代以

降の中国人が最も強く待ち望んでいた夢である。

この夢には過去のいくつもの世代の人々の深い思いが込められている。現在、われわれは過去のいかなる時期よりも、中華民族の偉大なる復興の目標に近づいている」

—— 中国人の琴線に触れるというわけですね。

渡辺 そうですね。2001年に中国がWTO（世界貿易機関）に加盟し、国際的にも一丁前の国と見なされるようになりました。それ以来、北京オリンピック、上海万博を矢継ぎ早に開催し、一昨年にはついにGDP（国内総生産）で日本を凌駕した。「中華民族の偉大なる復興」と言いたい気分になってきたのでしようね。

—— では、「中華民族の偉大なる復興」の意味とは。

渡辺 アヘン戦争のもう一つの時代に回帰したいということとは清の時代です。つまり彼らは「中華民族の偉大なる復興」

という言葉を通して、全盛の王朝時代に戻りたいという回帰願望を表現しているのです。

清は17世紀の初頭に生まれた中国王朝史の中でも最大の栄華を誇った王朝であり、「大清帝国」とも言われます。この時期は欧米諸国がいまだ産業革命も市民革命も経ていない時代で、清国は世界中から仰ぎ見られる存在でした。

その時代に回帰したいという、中国人のエリートが持っている願望を修辭化し、レトリック化したものが「中華民族の偉大なる復興」という言葉ではないかと私は考えているのです。

清王朝時代、康熙帝・雍正帝・乾隆帝という初期の偉大なる天子様の時代に、図2のような版図が築かれたというのが私の解釈です。

清は満州族が北京に攻め入って漢族を滅ぼして作った王朝です。しかし、たかだか300万人ほどの満州族では中国全体を征服できない。逆に、征服した満州族はむしろ伝統的な漢民族

の王朝に次第に同化し、満漢連合軍が結成されていたのです。この満漢連合政権が清国だったのです。

乾隆帝の時代に最盛期を迎え、モンゴル、チベット、ウイグルを組み込み、中国史上最大の版図を築きました。ウイグルはトルコ系のイスラム教徒の国です。モンゴルもチベットもウイグルも人種や宗教や言語や、もちろん風俗も習慣も漢族とは無縁です。それを併合してしまっただけですね。

—— そういった経緯もあって「大清帝国」と称した。

渡辺 はい。では異民族をどう組み込んだかといえば、「冊封体制」というもう一つの観念について理解しておくことが必要だと私は見えています。モンゴル族やチベット族やウイグル族を中華の礼式に服させ、見返りにそれぞれの支配者に王位を与えてその王に領土と領民の統治を委ねる、そういう伝統的な国際秩序観念が「冊封体制」です。すなわち、おまえたちは中国

の天子様を崇敬せよ。そうすれば、あなたたちにはチベット王、ウイグル王、モンゴル王としての王位を保証し、そこに住まっている住民については、おまえの統治を認めてやるというやり方です。

「事大主義」に 回帰した韓国

—— 封という領域を冊に囲むという意味ですね。

渡辺 そうです。「封」は「封土」と言い、土地を指します。冊に囲まれた土地ということですから。その上に住まっている領民についても統治を認めるということです。考えてみれば実に包容的な統治政策です。

明王朝の3倍に近い巨大な版図を征服するためには分治政策を採用するのは当然でしょうね。中央権力で全てを縛るためには、とてつもないエネルギーを必要としますからね。これはローマ帝国も同じでしたよね。—— このとき朝鮮半島やベトナムといった国々は中国に

よってどういった位置づけをさ
れていたのですか。

渡辺 大清帝国内の異民族の
みならず、外国である朝鮮もベ
トナムも冊封体制に組み込まれ
ました。朝鮮もベトナムも言う
までもなく外国ですが、清国に
とっては独立国家ではなかった
のです。

例えば朝鮮半島の場合、当時
は李氏朝鮮ですが、清国が君主
でした。李氏朝鮮は清の臣下で
あり、両者は君臣の関係にあっ
たのです。ベトナムもそうで
す。外国ではあるが自分の臣下
という位置づけです。君臣の関
係にあったので独立国家とは言
えませんがね。

——そうした歴史を踏まえて
今後の日韓関係は？

渡辺 現在の韓国は、朝鮮が
当時から持っていた伝統的な考
え方の現代バージョンなので
す。李朝の開祖・李成桂の言う
「小を以て大に事ふるは国を保
んずるの道なり」という「事大
主義」。これは韓国にとって拭
い難いものがあります。

—— 強い者に傾いていくと
いう事大主義？

渡辺 ええ。あの巨大な中国
の王朝の尻尾に当たる半島で李
氏の朝鮮が独立し、王朝として
認められる。これは容易なこと
ではない。自分は中華の礼式に
服する。その代わり、朝鮮を分
治の対象として認めてください
というわけです。

そうは言っても、中国の国力
が小さく、朝鮮自身の国力が微
小な時代であれば、事大主義が
顕在化することはありませんで
した。ところが、中国がこれだ
け大きな国となり、「G2」とも
言われるようになった。韓国自
身も有力な経済国家として登場
してきた。

そうなると、潜在的に眠って
いた遣伝子がむつくりと起き出
し、事大主義が露わとなった、
ということでしょうね。朴槿恵
大統領の時代になってはつきり
したことがこれです。伝統的な
事大主義への「先祖返り」が始
まったのです。

だとすれば、現在、日韓関係

は悪化していますが、これも話
し合いによって解決できるほど
容易なテーマではありません。
伝統への回帰力は強靱なものな
のです。

韓国は伝統に従って、次第に
日本から、そしてアメリカから
も離れて中国に傾いていく。そ
れは中国にとってウェルカムな
ことでもあります。私はこう
いった方向にユーラシア大陸が
動いていくのだからと見ていま
す。

集団的自衛権の行使 容認が対話を促す

—— 今後どういった対応を
していけばいいと考えますか。

渡辺 そうはいつでも、戦争
を好んでやることはできません。
やはり話し合いでの解決を
進めていかざるを得ない。しか
し外交交渉を一步でも有利に進
めるためには、日本が抑止力を
持たなければどうにもなりません。
そのための理論武装が不可
欠です。

理想主義者たちは、領土問題

というのは、どこの国でも難し
い問題だから長い時間をかけて
話し合いでやりましょうと言ひ
ます。尖閣諸島の共同管理も一
つの方法だとか、関係国である
ステークホルダーが集まって北
朝鮮をめぐる六者協議のような
ものを作るといった方法もあると
いったことを言う。

しかしこれでは日本を不利に
するばかりです。話し合いはい
いですが、その背後に抑止力を
持つことが不可欠です。力を持
つということは、そんなに難し
い理屈ではなくて、集団的自衛
権行使容認を政府解釈の中で
はつきりと明言すればいいので
す。

もしこれができるのであれ
ば、次のステップとして国論を
まとめて憲法9条改正までいけ
ばベストですが、政治日程とし
てはものすごく大変でしょう
ね。そこに至る前に安倍政権の
中でできることは、集団的自衛
権の行使容認の解釈変更です。

—— これは現行法の枠の中
でも解釈できる？

渡辺 はい。政府解釈の中でできます。そのために安倍内閣は国会に提出する法案を事前審査する内閣法制局の長官に新しい人を選び、準備を着々と進めてきています。来年の春頃には、「安全保障の法的基盤の再構築に関する懇談会」の答申が最終的に出ます。

—— 解釈することで対応し、憲法改正に向かうという流れが現実的な対応になりますね。また、先般、特定秘密保護法が成立しました。この法律は日本の安全保障を確固たるものにするという趣旨でつくられたわけですが、「知る権利」が損なわれるという理由で反対もありました。これに対し、戦前の治安維持法と結びつけてはおかしいという指摘も上がっています。

渡辺 ええ。戦略国家・中国への対応としては、いかにも日本の戦略のなさを見てくださいと言っているようなものです。安倍首相は強行突破しましたが、私はこの法案が通って本当

に良かったと思っています。もし通過しなければ、この法案は、今後10年以上も休眠状態が続いたのではないのでしょうか。

戦略国家として日本は再生を

—— とにかく自分たちの国は自分たちの手で守ることが安全保障の基本的な考え方で、今は日米同盟を基軸にそれを実現していくという考えですね。

渡辺 はい、そうです。ひよっとしたら、そのところが中国と韓国は読み損なったのかもしれない。安倍政権登場以来の中国包囲網外交で、今は中・韓の方が孤立していますからね。「ちょっとやり過ぎたか」という反省は彼らの最近の公式文書の中にも浮かび上がっています。

—— 中国と韓国の今の対応は日本の両国に対する投資にも影響を与えています。

渡辺 産業界の首脳もそういうことを発信し始めましたね。日本には1億2600万人と

いう人口があり、国民の基礎技術も科学技術も産業技術も世界に侮られることのないものを持つています。この日本人の次世代がもし反発をして核を開発し、保有することを宣言したら中国、韓国はどうするのでしょうか。

しかも民主主義国家である日本は核開発・保有を、投票行動を通じて実現できる国です。民意を通じて核を開発し保有するという工程表を作るという話になるかもしれません。そのときに韓国や中国はそれでいいのですか、と私はよく国際会議などで発言します。

彼らにこのように尋ねますと、もちろん反論はしてきますが、一呼吸おいて発言まで5〜6秒かかるんです。やはり力を持って対話することは私の経験上でも一番良い方法だと思えます。

—— もっと日本は情報を発信すべきだし、戦略的国家たれということですね。

渡辺 戦略国家でなくて日本

が生き延びていけるわけがありません。日清・日露戦争も日本は戦略で勝ったんです。兵力においては負けていたのに、国際情報を正確に読む力を発揮して一番効率的な戦争をやった。

日露戦争でも当時、経済的にも軍事的にも圧倒的な強国であったロシアに対し、日英同盟を結んでこの同盟に自分の力を発揮させました。往時の日本人の知恵はすごかったと思いますね。

今回は特定秘密保護法が成立したことで何とかここで踏みとどまれました。アメリカは日本をこれまでより信頼するようになるでしょう。秘密が筒抜けになるアメリカも機密情報の7割しか日本に伝えていなかったとも言われています。

自らの国は自ら守るという基本姿勢を明確にし、将来の国家ビジョンを見据えた戦略をしっかり構築していくことが、これからの日本の生きる道だと思います。